様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ５ 月 ２２ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｋ０２５７９

研究課題名（和文）大学生の健康観察の活用状況から、初等中等教育での自己管理能力育成の方策を提案する

研究課題名（英文）Propose measures for fostering self-management skills in primary and secondary education based on the utilization of health checks for university students.

研究代表者
石井　有美子（ishii, yumiko）

香川大学・医学部・准教授

研究者番号：５０８９７８７４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：大学生の質問紙調査から健康観察結果の活用状況と活用を促進・阻害している要因の究明，及び養護教諭のインタビューから健康観察結果の活用に関する保健教育の実際と課題，指導の可能性を検討した。健康観察結果を日常生活や健康行動につなげるためには，活用を促す保健教育だけでなく，ソーシャル・サポート，ヘルスリテラシーの向上の教育も必要であることが確認できた。保健教育の指導時間確保が困難な状況であるため，全校の健康観察の結果を把握し保健教育につなげる役割を担う養護教諭が取り組みやすい，短時間の保健教育が実践できるよう，指導事例を参考に展開例のさらなる検討が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では，初等中等教育で行われている朝の健康観察の日常生活への活用，すなわち自己管理能力の育成を取り上げた。日常生活への活用を促す教育だけでなく，ソーシャル・サポート，ヘルスリテラシーの向上のための教育も必要であることを明らかにできたことは学術的意義がある。また，社会的意義としては健康観察結果の日常生活への活用にむけた保健教育の改善，児童生徒の将来にわたる健康の維持，増進，疾病の予防，よりよい医療サービスの活用等，ヘルスリテラシー向上に寄与するものと期待できる。

研究成果の概要（英文）：The questionnaire survey of university students was used to determine the status of utilization of health check results and the factors that promote or hinder utilization, and interviews with school nurse teachers were used to examine the actual situation and issues in health education regarding the utilization of health check results and the possibility of providing guidance. In order to link the results of health checkups to daily life and healthy behaviors, it was confirmed that not only health education to promote the use of health checkup results, but also education to improve social support and health literacy are necessary. Since it is difficult to secure teaching time for health education, it is necessary to further study examples of health education based on the case studies so that school nurses, who are responsible for grasping the results of health checks at all schools and linking them to health education, can easily implement health education in a short period of time.

研究分野：学校保健

キーワード：健康観察　日常生活への活用　保健教育　自己管理能力

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９，Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

内閣府の平均寿命の将来推計によれば，今後，男女とも平均寿命は延びて，2067 年には女性は 90 年を超えると見込まれている[1)]。また，2019 年の日本の平均寿命と健康寿命の差は約 9 年から 12 年であり，健康寿命の延伸において学童期からの健康な心身の形成，健康の自己管理能力の習得が重要になる。学校では学級担任などを中心として，朝の会やショートホームルームで健康観察が実施されている。健康観察の目的は，①健康問題の早期発見，早期対応，②感染症の拡大防止，③自己管理能力の育成の 3 点であり，教育活動の一環として実施している。すなわち，保健管理的な機能だけでなく，将来にわたる健康の保持増進のための教育的機能も含まれている。2009 年の学校保健安全法の改正において，これまで学級担任などにより行われてきた健康観察が法的に位置付けられ充実が図られた。

しかしながら，教師対象に行った調査[2-5)]によれば，健康観察の目的の①と②を中心に実施され，③自己管理能力の育成は芳しくないと報告されている。また中嶋[6)]や亀崎ら[7)]の調査によれば，自分の痛みや苦しみを上手く言葉にできない，養護教諭が詳しく様子を聞かないと自分の状態が答えられない，症状しか言えず原因にたどり着くまで時間を要するなど保健室を利用した際の児童生徒の様子からも自己管理能力の育成が不十分であることがうかがえる。

加えて小中学生の調査[8)]では，健康観察結果の日常生活への活用は，「生活に役に立つ」と「体調不良を家人に伝える」では 6 割以上，「1 日の過ごし方を考える」「今後の生活の仕方を考える」は 3 割程度の活用で，概ね小学生の方が中学生よりも有意に活用していた。

以上から，健康観察の教育的機能に大きな問題があると考えられ，子どもたちの自己管理能力の向上につながる効果的な健康観察や保健教育の具体策を探る必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は，①大学生の健康観察結果の日常生活への活用状況と活用を促進・阻害している要因を究明する。②小中学校の養護教諭等を対象としたインタビュー調査により，「健康観察結果の活用」の仕方に関する教科外の保健教育の実際と課題，指導の可能性を明らかにすることで，今後の効果的な保健教育の指導方法を提案することである。

３．研究の方法

（１）大学生の朝の自己健康観察の実施状況と結果の活用状況

質問紙調査は，2022 年に関西・四国の 3 国立大学の看護学専攻と保健体育専攻の学生を対象に実施した。質問項目は，健康観察の日常生活への活用状況，健康行動への活用，活用する時の負担感・抵抗感，ソーシャル・サポート，ヘルスリテラシー，専攻，学年，居住状態等とした。関連性の分析では，活用状況の各項目の有無に対して，活用する時の負担感・抵抗感，ソーシャル・サポート，ヘルスリテラシーをそれぞれ高群と低群に分け，二項ロジスティック回帰分析を用いた。ただし，健康行動への活用については，各項目の高低に対して，二項ロジスティック回帰分析を用いた。

本研究は，徳島大学病院生命科学・医学系研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 4139）。研究対象者には，研究の趣旨や研究への参加は任意であり，プライバシーにかかわる情報は決して公開されないこと，途中の中断も可能であること等を説明し，対象者の同意を得た。

（２）養護教諭へのインタビュー

2024 年 1 月に A 県 4 市町に所在する公立小中学校の養護教諭に電話連絡にて，研究協力に同意の意向を確認した。同意の意向を示した養護教諭が勤務する学校の校長，養護教諭宛に協力依頼文書，調査内容を郵送し同意を得た。協力承諾の文書を受理後，インタビューの日程調整を行った。インタビュー調査は，2 月末から 3 月に行なわれた。参加者は，教職経験年数 5 年以上の養護教諭 10 名である。インタビュー内容は，健康観察結果の活用の仕方に関する、集団の教科外の保健教育の経験の有無、保健教育の目的，対象学年，内容，工夫点，得られた成果，課題等である。経験がない場合は、集団の教科外の保健教育を行うとしたら、どんな指導が可能について調査した。インタビューデータは，Word のトランスクリプト機能を使って文字起こしし逐語録を作成した。分析テーマは，「健康観察結果の活用に関する保健教育の内容及び実施の課題」とした。全てのデータを熟読し，　分析テーマに関連する箇所のコーディングを行い，カテゴリ化を行った。これらの分析過程や結果は，複数の研究者で複数回の確認を行った。

本研究は、徳島大学病院生命科学・医学系研究倫理審査委員会の承認（No. 4462），当該施設長の実施許可を得て，ヘルシンキ宣言および人を対象とする医学研究に関する倫理指針を遵守し実施した。

４．研究成果

（１）大学生の朝の自己健康観察の実施状況と結果の活用状況

回答者における女子の割合が 83.1%と高く，分析対象を女子に限定した。コロナ禍における

健康観察の実施率は 8 割と高く，日常生活への活用状況も 7～8 割と高かった。小中学生の日常生活への活用状況（3 割～6 割）[8]と比較すると大学生の方が活用の割合が高く，自己管理が一層求められる大学生は，身体的変化を感じた時，どのような行動をとればよいか自身で判断し，健康観察の結果を活用していることが示唆された。看護学専攻と保健体育専攻の専攻間で有意差が見られたのは「日常生活への有用性」のみで，健康に関する知識がある看護学専攻の学生であっても健康観察結果から 1 日の過ごし方や以降の生活の仕方を考えたり，健康行動につなげたりすることは容易ではないと考えられた。このことから健康観察の実施とは別に，結果の活用を促す保健教育の必要性が示唆された。

自己健康観察結果の日常生活への活用及び健康行動への活用促進には，社会的要因であるソーシャル・サポート及びヘルスリテラシーが部分的に関連した。また活用阻害には，心理的要因の日常生活の変更への抵抗感及び医療機関受診時の負担感が部分的に関連した。健康観察の結果を日常生活や健康行動へ活用し，自己管理能力を高めるためには，ソーシャル・サポート，ヘルスリテラシーの向上が必要であることが示唆された。

（2）養護教諭へのインタビュー

健康観察結果を活用した集団の保健教育を行っている養護教諭は半数を満たず，十分行えていなかった。実践例としては，「健康観察を実施することの意義」「自分の健康状態の伝え方」「体調が悪い友だちへの対応」「からだとこころのつながり」等であった。集団の保健教育が実施困難な理由としては，「症状の訴えが個人で異なる」「症状が起こる原因が様々」「保健教育の時間が確保しにくい」ことがあげられた。集団の保健指導で指導可能な内容としては，「健康観察実施の意義，必要性」「心と体の症状の意味とその対処方法」「健康観察の結果と生活習慣との関連」等であった。

養護教諭が考える健康観察結果を活用した保健教育の意義と課題を図 1 に示した。養護教諭は，集団の保健教育について指導の意義や効果があると捉えているものの，健康観察結果の活用は保健管理が中心で【健康観察結果の活用が不十分】な状況であった。加えて【集団の保健教育の指導の自信のなさ】や【教員の多忙化による時間確保が困難】な現状が重なり，集団の保健教育の実施が難しい状況にあることが語られた。そのため養護教諭の裁量で時間が確保できる個別の指導を重点に養護教諭が取り組んでいることが明らかになった。保健教育の時間が確保しにくい現状であるため，養護教諭が取り組みやすい短時間の保健教育の展開例を提案していく必要がある。

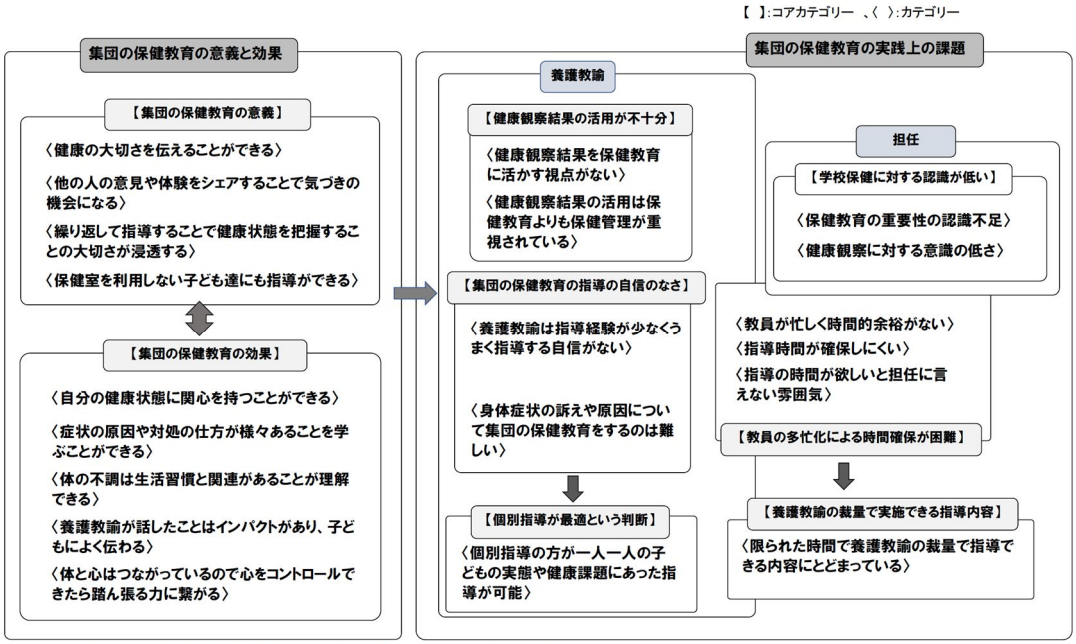

図1 養護教諭が考える健康観察結果を活用した保健教育の意義と課題

〈引用文献〉

1) 内閣府：令和 2 年版高齢社会白書（全体版）（PDF 版） Available at：https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2020/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf Accessed May 20, 2025

2）石山志央子，小林央美，新谷ますみ：学級担任が行う健康観察に関する実態調査．弘前大学教育学部紀要 116，31-36，2016

3)江嵜和子，土生素子：小学校における朝の健康観察簿の活用に関する研究．九州女子大学紀要 49，161-182，2013

4)沢田真喜子，物部博文，植田誠治：健康観察の実施に関する研究（第 2 報）．学校保健研究：59，435-444，2018
5)沢田真喜子，物部博文，植田誠治：健康観察の実施に関する研究（第 1 報)－健康観察の実施状況－．学校保健研究：59，123-132，2017
6)中嶋英梨：保健室経営における思考力・表現力を育む実践 記述式カードから児童生徒の思い・考えを引き出す養護教諭のアプローチと評価．教育実践研究，28，265-270，2018
7)亀崎路子，荻津真理子：小学生および中学生の傷病に関する表現と養護教諭の対応．学校保健研究 60，219-232，2018
8)石井有美子，奥田紀久子，田中祐子,西岡伸紀：小中学生における朝の健康観察の日常生活への活用―恩恵，負担，ソーシャルサポート，ヘルスリテラシーとの関連性―．学校保健研究，64，235-247，2022

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 石井 有美子、奥田 紀久子、田中 祐子、西岡 伸紀	４．巻 64
２．論文標題 小中学生における朝の健康観察の日常生活への活用	５．発行年 2022年
３．雑誌名 学校保健研究	６．最初と最後の頁 235～247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20812/jpnjschhealth.64.3_235	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 石井 有美子、西岡 伸紀、奥田 紀久子、宮本賢作、田中 祐子	４．巻 66
２．論文標題 朝の自己健康観察の結果の活用状況及び心理社会的要因との関連性―コロナ禍における看護学専攻及び保健体育専攻の女子大学生対象調査―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 学校保健研究	６．最初と最後の頁 105～116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20812/jpnjschhealth.66.2_105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 石井有美子，西岡伸紀
２．発表標題 大学生の健康観察結果の日常生活への活用 －ソーシャルサポート，ヘルスリテラシーとの関連－
３．学会等名 日本健康教育学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 石井有美子，奥田紀久子，田中祐子
２．発表標題 小中学生の朝の健康観察結果の日常生活への活用 －「１日の過ごし方について考えたこと」の自由記述の分析から－
３．学会等名 日本学校保健学会
４．発表年 2023年

１．発表者名
Yumiko Ishii, Nobuki Nishioka, Kikuko Okuda, Kensaku Miyamoto, Yuko Tanaka

２．発表標題
The relationship between morning self-health checks and health literacy of first-year University students in the COVID-19 pandemic

３．学会等名
East Asian Forum of Nursing Scholars（国際学会）

４．発表年
2024年

１．発表者名
Yumiko Ishii、Kikuko Okuda、Yuko Tanaka、Nobuki Nishioka

２．発表標題
A Study of Morning Health Checks in Japanese Schools -Results of a Questionnaire Survey of Students-

３．学会等名
International Collaboration for Community Health Nursing Research（ICCHNR）　（国際学会）

４．発表年
2022年

１．発表者名
石井有美子、奥田紀久子，田中祐子，西岡伸紀

２．発表標題
朝の健康観察結果の日常生活への活用と恩恵・負担，ソーシャルサポート及び ヘルスリテラシーとの関連

３．学会等名
日本学校保健学会第67回学術集会

４．発表年
2021年

１．発表者名
Yumiko Ishii, Moeko Fujikawa, Kikuko Okuda, Nobuko Tokuchi, Kimie Tanimoto, Nobuki Nishioka

２．発表標題
The Current Situation and Significance of Group Health Education in Utilizing Health Check Results －Insights from School Nurse Interviews－

３．学会等名
22nd Biennial School Nurses International Conference Japan 2025（国際学会）

４．発表年
2025年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

―

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	奥田　紀久子 (okuda kikuko) (60331857)	徳島大学・大学院医歯薬学研究部（医学域）・教授 (16101)	
研究分担者	田中　祐子 (tanaka yuko) (10535800)	東京医療保健大学・看護学部・教授 (32809)	
研究分担者	森　健治 (mori kenji) (20274201)	徳島大学・大学院医歯薬学研究部（医学域）・教授 (16101)	
研究分担者	西岡　伸紀 (nishioka nobuki) (90198432)	京都女子大学・心理共生学部・教授 (34305)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関